

ある外、現在は東亜から約25種も知られるようになり、その中にはノギランとの中間の形質を示すものもあって、正宗博士はフィリッピンにノギラン属が産することを報じ、また *Meta-aletris* という新属を建てられたこともある。ヒマラヤ東部産の *Aletris gracilis* では花は一見ノギランに非常によく似ているが、花被片は下部で癒合し子房は半上位になっている。要するにこの群では種によって花被片の癒合の程度に幅広い差があることが明らかになった。また花粉や染色体などについてもこれらを別属とする根拠はみあたらない。上記のことから私はノギランをソクシンラン属へ入れる Franchet の見解に賛成である。

ノギランについても分布が広いので色々な変異が観察され、葉や花の大きさが著しく変る以外に花が下向するものが記録され、また花柱や葯の長さも個体群によってかなり変る (Fig. a & b)。屋久島の山地に見られるような矮小形は箱根山や愛鷹山にもある。

□ 檜山庫三氏の逝去 檜山庫三氏 (Kôzô HIYAMA, 1905—1967) は明治38年12月12日に小石川区雑司ヶ谷町に出生。昭和42年6月1日に長逝された。心筋硬塞のため、2日ほどの間に全く急に他界された、享年 61 才。昭和4年に明治大学商学部を卒業されて以来、40年間という研究歴は独学により培われたものであった。昭和34年6月1日から東京都立大学講師として理学部附属牧野標本館に勤務され、牧野コレクション約40万点の腊葉の同定に専念された。本年6月1日の逝去までにほぼ8万点を同定され、その努力は真に非凡である。牧野標本館が内外諸研究機関と対等の研究便益を頒ち合えるようになったのは、檜山氏の努力に負う所甚大である。氏の学は分類学の基礎固めに終始一貫していた。時折の成果は本誌の読者のよく御承知の通りである。この間、昭和10年12月に、同好会誌「野草」を創刊し、本年11月に通巻 300 号に達する。これは氏の野外植物同好会の創始、経営30年以上の成果である。アマチュアとして立ち、アマチュアの養育に尽力された檜山氏は経済的には恵まれなかったが、一生を真剣に、植物を愛し、植物と共に生きられた。だが昨春結婚されて新しい人生にふみ込まれ、新しい気持で研究に突入された矢先の不幸は、惜しみても余りある。ここ10年間に著書数冊をまとめられたが、その主なものとして「花草木」(植物の名の話)、「植物採集」,「武蔵野植物記」, その姉妹篇「武蔵野の植物」等がある。

我々は第一級の野外植物学者を失ったが、その学燈の消えることなく輝かんことを強く強く希望する。

(水島 正美)

